四天王寺大学紀要　第46号（2008年９月）

清末中国人日本留学生兪大純の出自とその生涯
―「留日反日」論にも関連して―

呂　順　長

（平成20年３月31日受理　最終原稿平成20年５月20日受理）

要旨

20世紀初頭に二度も日本に留学し、帰国後相応の活躍をした兪大純は、従来その出自に疑問があり、その生涯の活動に対してはほとんど研究されていない。本稿では、まずいまだ謎に包まれる部分も多い兪大純の出自について、諸種の資料を整理し、兪大純は兪明震の子ではなく、兪明堂の子である可能性が高いことを指摘した。次に兪大純の生涯の活動を考察し、青年時代に清朝政府要員の暗殺にも積極的に参加し、また満州事変後には日本の中国東北支配に強い憤慨を抱き、自らその実地調査にまで乗り出していた兪大純が、1937年以降は日本の傀儡政府のもとで職を得、最終には「漢奸」と目されて、国民党政府の特務機関に暗殺された、という皮肉ともいうべき事実関係を明らかにした。最後に「留日反日」という従来の説にも関連して、日本留学生の中に反日的な者が多く出たといわれる反面、事実上親日的と見られる人も少なくなく、さらに反日的または親日的と見られても、実際はそうではないケースも考えられると指摘した。

キーワード：兪大純　兪明震　日本留学　反日　親日

はじめに

近代中国人の海外留学は、民国以降欧米への留学生も増えていたが、全体の流れと人数から見ればやはり日本を中心に展開されていたと言えよう。1896年に始まったとされる中国人の日本留学は最初の16名から約10年後のピーク時の1905～1906年には1万人前後に達し、その後も毎年数千人の規模で20世紀30年代まで続いていた。アメリカ留学生の「少数良質」に対して、日本留学生は「多数速成」といわれ、日本留学は速成留学が大きな比重を占め、人数は多いものの、質はアメリカ留学生に劣るとされる。しかし、これらの日本留学生は帰国後いろいろな分野で活躍し、彼らが近代中国に及ぼした影響は決してアメリカ留学生より小さいとは言えまい。

近年日本留学生に関する研究が進み、留学生の帰国後の活躍についても多くの研究成果が上がっている。しかし、多くの研究では、表舞台で活躍したごく一部の有名人しか取り上げられておらず、それ以外の膨大な数の留学生はそれなりに活躍していたものの、注目度が低いため、歴史の闇に埋もれたままである。

本稿は、限られた史料に基づくものではあるが、従来あまり知られていない浙江紹興出身の

留学生兪大純の出自、留学経過、帰国後の活動を考察し、さらに兪大純の日本関連の言動をも一例として、学界でほぼ定説になっている「留日反日」論に対しても分析を加えてみることにする。

一、兪大純の出自

数年前、筆者は拙著『清末浙江與日本』（上海古籍出版社、2001年）の中で軍国民教育会[1)]のメンバーとして兪大純の名前をあげたことがある。その後、紹興市地元の研究者呂金水氏、兪氏家族の関係者袁維徳氏より兪大純の出自と日本留学について相次ぎ問い合わせがあった。兪大純はいったい紹興の名族である兪氏第38世兪明震の子なのか、それとも同じく兪氏第38世兪明堂の子なのか、その日本留学の経過はいかなるものか、という内容であった。

兪明震（1860 - 1918）、字は恪士、号は觚庵、清末の教育界、政界で活躍した人物である。清光緒十六年（1890）に進士となり、翰林院庶吉士に任じられる。1895年に台湾布政使に任命され、日清戦争後台湾が日本に割譲されることが決定されると、唐景崧らとともに台湾民主国を樹立して、内務大臣に就任したが、台湾が完全に日本に占拠された後に中国本土に戻り、おもに教育界で活躍した。1902年4月、江南陸師学堂総弁・江蘇候補道として、陸師学堂卒業生22名と魯迅らその付設の路鉱学堂卒業生6名を率いて来日したこともあり、魯迅はその作品の中で恩師としてよく兪明震のことを「恪士師」と表現している。1910年からは甘粛省提学使、甘粛省布政使などを歴任している。著作に詩集『觚庵詩存』、文集『觚庵漫筆』がある。

同じく紹興兪氏第38世の兪明堂（1851-1932）は、兪明震ほど注目された人物ではなく、清光緒年間に挙人になったが、結局仕官の途を求めず商業を営み、兪氏一族の族長を務めた。

また、紹興の兪氏家族は歴史上優れた人物を輩出したのみならず、現在でも兪大純の後裔を含めて中国内外の各分野で活躍している有名人が多数存在する。

兪大純はこのような名族の一員として清末に生まれ、そして清末と民国時代に相応の活躍をしていた。しかし、不思議なことに彼の出自はまだ謎に包まれている部分が多い。兪明震と兪大純の名前は現在でもいろいろな読み物や論文の中でよく同時に取り上げられている。それだけを考えても、両者の関係を明らかにする必要がある。

筆者はもともと兪大純の研究にあまり興味を持っていなかったが、長く兪氏家族関係者袁維徳氏と文通を続けるうち、次第に関心を持つようになり、近年兪大純関連の資料を集めたりしてきた。

では、兪大純の出自について、各種の史料に基づいて考察していこう。

まず袁維徳氏から提供された『兪氏宗譜』[2)]によると、兪氏第38世兪明堂には大湄、大純、大馥、大有の四人の子があり、大純は兪明堂の次男として光緒九年（1883）に生まれ、字は光潤とされている[3)]。また同じ第38世の兪明震については、先代から湖南に移住したためか、その父（兪文葆）の代までは名前が記録されているものの、それ以下は名前さえ載っていない。単にこの宗譜を見る限り、兪大純が兪明堂の子であることは明らかである。

また、張篁溪は「蘇報案実録」の中で、兪大純が兪明震の甥であると述べている[4)]。兪明震

と兪明堂は従兄弟同士であるので、この兪大純は上記『兪氏宗譜』に記す兪明堂の子である可能性がきわめて高いであろう。

しかし、問題はそう簡単ではない。このほかに兪大純が兪明震の子であるという早期の記録もあり、また現在ではそれが各種の読み物の中でほぼ定説のように扱われているからである。早期の記録としては、上記張篁溪の「蘇報案実録」にあるように、兪大純の名前が多くの場合『蘇報』事件に絡めて登場するので、ここで同事件について少し触れておく。

『蘇報』事件というのは1903年に上海で起きた清朝当局による言論弾圧事件である。事件の主な関係者として、捜査責任者の江蘇候補道・陸師学堂総弁兪明震、『蘇報』主筆章士釗、主要執筆者章太炎・鄒容・ 蔡元培・呉稚暉など、中国近代史上の錚々たる人物が連なるが、兪大純も捜査責任者兪明震の近辺で活躍したとされる。当時、多くの当事者がこの事件についていろいろな記録を残しているが、そのうち、章士釗と呉稚暉はそれぞれ「蘇報案始末記叙」[5]と「呉稚暉述上海蘇報案紀事」[6]の中で、兪大純は兪明震の子であると触れている。これは上記張篁溪の「蘇報案実録」が「甥である」と記すのと大きく異なっている。

章士釗は直接「蘇報案始末記叙」の中で自分が兪大純と交友関係があると述べており、また呉稚暉も兪大純と直接面会したりして長年付き合っていたとされ、両者とも兪大純と近い関係にあった。ゆえに彼らの記述もかなり信用度が高いと言えよう。

さらに『蘇報』事件と関連して、1903年7月に湖広総督端方が両江総督魏光燾に宛てた電報の中にも、「兪明震の子兪大純は、現在遊学先日本より帰国している。聞くところによると、兪大純が日本で辮髪を切り、革命軍に入り、正道に反し、道義を失す。兪道（明震）がその子を深く憎むが、（明震にも）防備しないわけにはいかない。」[7]と兪大純を兪明震の子とし、彼が日本留学期間中に革命活動していたなどの情報を提供し、捜査責任者の兪明震にも警戒心を持たなければならないと注意している。

このように、国内外に大きな影響を及ぼした『蘇報』事件の捜査責任者兪明震と関わりがあったことから、兪大純の名前が1903年頃より注目され始めたのである。その後、これらの記事により社会一般にも兪大純と兪明震が父子関係であると認識されるようになったと思われる。一方、上記張篁溪の「蘇報案実録」の記述によるものかと思われるが、兪大純は兪明震の甥であるという記述もたまに見られる。こういう状態がずっと現在まで続いている。たとえば、筆者が最近目にした書物だけでも、徐鋳成の『報海旧聞』（上海人民出版社、1981年）、叶永烈の『江青伝』（作家出版社、1993）、朱順佐の『紹興名人辞典』（国際文化出版社、1994）、黎東方の『細説民国創立』（上海人民出版社、2007）など、みな両者が父子関係であるとしている。また数え切れないほどのインターネット上の文章ではほぼすべて二人を父子関係として取り上げられている。しかし、同じ徐鋳成が『旧聞雑憶』（遼寧教育出版社、2000年）の中では兪大純を兪明震の甥としている。

こういう状況に鑑み、紹興地元の研究者呂金水氏が兪大純の出自を明らかにするため、兪明震の先祖の移住先の北京・湖南の『兪氏宗譜』を探し、兪氏後裔に聞き取り調査を行った。結局『宗譜』は見つかっていないが、兪大光（兪大純と同じ兪氏第39世、中国工程院院士）や兪

声恒（兪氏第41世）などの諸氏と連絡をとり、兪明震が兪明堂の子兪大純（甥）を養子にしたのではないかという個人的推測について意見を求めたところ、反対意見を述べられたという。それから、同氏はさらに兪明震の詩や筆者が提供した兪大純日本留学期間中の資料などに基づいて研究を進め、兪明震と兪明堂にそれぞれ兪大純と名乗る子がいたという結論に達している[8)]。そして、兪大純が二人いたという呂金水氏の説は、最近兪大光氏の編纂した『浙江紹興斗門兪氏宗譜増補材料』[9)]にも受け入れられている。

呂金水氏の主な論拠は次の二つである。まず、兪明震の詩『出都宿楊村作』[10)]（1879年冬の作品）の中に「憶昔別家時、凄風入庭室……幼子牽婦衣、呱呱為我泣」という句があり、ここに見える「幼子」が兪名震の子であると見られ、その年も大体『清国留学生会館報告』に記載されている兪大純の年齢（1903年、23歳）とほぼ一致しているとされる。次に八指頭陀『紀夢詩一首並序』に「二月十四日夜、與曹蔭萱、徐孟虎、兪寿臣及其侄慎修、冒雨同至一山」という記録があり、この兪寿臣は兪明震の弟兪明頤のことで、慎修は兪大純の字であるから、この兪寿臣（明頤）の甥（侄）は兪明震の子だろうと判断されている。つまり、1879年頃に生まれたとされる上記の詩の中の「幼子」こそが1902年に日本に留学し、『清国留学生会館報告』に記載されている兪明震の子兪大純であり、『兪氏宗譜』に記載されている1883年生まれの兪明堂の子も日本留学はしていたが、別個の人物であると結論付けられたのである[11)]。

しかし、この推論には疑問がないわけでもない。まず、兪明震の詩の中の「幼子」は1879年の前半に兪が故郷を出る時すでに生まれているから、生まれたのは遅くとも1879年の早い時期である。そうすると、1903年には少なくとも24歳以上になる。つぎに、八指頭陀『紀夢詩一首並序』の兪明頤の甥は兪明震の子である可能性があると同時に、兪明堂の子である可能性も十分残る。兪明震と兪明堂は従兄弟同士だからである。

しかし、兪大純が唯一兪明堂の子であると断定するにも、上述『蘇報』事件の関連記事の記載との矛盾や、ほかの史料に示される彼の字、生年などへの疑問がある。次にできるだけ諸種の史料に基づいて彼の字や年齢などを取り上げて分析してみよう。

氏名	字	出身地	生年月日	年齢	来日年月	学校	出典
兪大純	光潤	山陰斗門	1883年8月30日				①『兪氏宗譜』
兪大純	省羞	山陰徒門				成城学校在学	②『紹興同郷公函』付録「在留東京紹興同郷人姓氏表」）[12)]
兪大純	有羞	山陰	（1880）	23歳（1903年）	光緒28年12月	成城学校在学	③『清国留学生会館第二次報告』付録「同学姓名報告」
兪大純	慎修	山陰			光緒28年11月	予備入学	④『清国留学生会館第三次報告』付録「同学姓名報告」
兪大純	省羞	紹興山陰	（1880）	23歳（1903年）	光緒28年11月	成城学校在学	⑤『浙江潮』第三期「浙江同郷留学東京題名」

兪大純		浙江	(1883)	25歳 (1908年)	光緒31年 9月	1908年4月第一高等学校に入学	⑥遊留学生監督処『官報』(第十七期)
兪大純			(1883)	20歳 (1903年)			⑦呉稚暉『上海蘇報案紀事』
兪大純	慎修[13]	浙江紹興	(1883)	54歳 (1938年)		日本第一高等学校・ドイツベルリン工科大学卒業	⑧李文裿・武田熙『北京文化学術機関総覧』

(注　生年月日欄括弧内の生年は年齢による推算の数字)

一覧からわかるように、資料によってまず1883年と1880年という生年の違いがあり、また光潤、省羞、有羞、慎修という字の違いもある。省羞、有羞、慎修は発音と意味が近く、同じ人物とすることには、ほかの資料の例から見ても従来異議がない。しかし、『兪氏宗譜』の中の兪大純(字が光潤、兪明堂の子)が省羞、有羞、慎修という字の兪大純と同一人物なのか、もし同一人物であれば、なぜ資料により生年の違いが生じ、また後に兪明震の子であると周辺の人に認識されるようになったか、という疑問が残る。この謎を解くため、それぞれの資料を分析してみることにする。

出典③『清国留学生会館第二次報告』所収の「同学姓名報告」は1903年3月頃に東京にいた670名の留学生に対して行った調査の報告であり、それぞれの氏名、年齢、出身地、東京到着年月、官・私費の種類、学校と科目が記されている。ゆえに年齢の欄に記載されているのは1903年の時点での年齢である。そのうち、いまその実際の生年がわかる範囲内で十数人の年齢を確かめた結果、周樹人、章宗祥、蒋方震などは「同学姓名報告」記載の年齢が実際の年齢と一致している。しかし、一致しないものもあり、たとえば、陶成章と湯槱は同じ1878年の生まれなのに、記載されている年齢は27歳と22歳で、両者の間に5歳の差が生じていて、曹汝霖の実際年齢は26歳なのに記載年齢は28歳となっている。一覧にまとめると、次のとおりである。

氏名	字	実際の生年	1903年の実際年齢	「同学姓名報告」の記載年齢	実際との差
陶成章	煥卿	1878年	25歳	27歳	＋２歳
湯槱	爾和	1878年	25歳	22歳	－３歳
曹汝霖	潤田	1877年	26歳	28歳	＋２歳

このように違いが生じたのは、記載の際の単純ミスなのか、それとも当事者が何らかの原因で故意にしたのかは不明であるが、記載されている一部の留学生の年齢をそのまま信用してはならないということはできる。なお、出典⑤『浙江潮』第三期「浙江同郷留学東京題名」は出典③と同じく留学生会館での記録によるものであると見られる。つまり、出典③と出典⑤に記載されている兪大純の年齢は彼の実際年齢と違うという可能性も考えられる。

さらに、ほかの資料を見てみよう。出典⑦の呉稚暉著『上海蘇報案紀事』に1903年の時点で20歳前後と記載されている兪大純が、上記出典③④⑤に記載されている、1902年に日本に行き1903年の『蘇報』事件の前に帰国し、兪明震の関係で事件と関わった兪大純(字は省羞)と同一人物であることは、『蘇報』事件の際の呉稚暉と兪大純とのかかわりから容易に分かる。し

かし、同一人物なのに、両者の記録に生年の違いが生じている。前述のように、出典③と⑤の年齢記載は実際とは異なる可能性もあるから、出典⑦に記載されている年齢のほうが信用できよう。その補強材料として同じ生年が示されている出典⑧と⑥の資料もあるからである。

出典⑧李文袴・武田熙編『北京文化学術機関総覧』に記載されている日本第一高等学校・ドイツベルリン工科大学卒業の兪大純（1938年で54歳、北京市立高等工業職業学校校長）と、出典⑥遊学生監督処『官報』に記載されている第一高等学校に在籍していた兪大純とは、その卒業学校も年齢も同じであるから、同一人物であるに違いない。そして、この日本留学の後に、ドイツのベルリンに留学した兪大純は、ドイツ留学期間中に蔡元培と交流のあった、字を省羞という兪大純と同一人物であることは明らかであろう[14]。

順序が前後したが、出典②の兪大純はその字から見ても、出典③～⑧の兪大純と同じ人物であることが分かる。

つまり、出典②～⑧の史料に記載されている兪大純が同一人物であることはこれでほぼ確認できる。そして、その生年は1880年の可能性は低く、1883年のほうが正確であろうと思われる。

最後に、問題の核心に迫るが、出典①『兪氏宗譜』に兪明堂の子として記載されている兪大純と、出典②～⑧の兪大純とは同一人物であろうか。出典②の兪大純の「里居」（住所）が山陰徒門（徒門は斗門の異称）ともなっていて、出典①『兪氏宗譜』の記載と一致している。こうしてみれば、出典①の兪大純と出典②～⑧の兪大純の間には、字の違いがあるだけで、その氏名、生年、出身地、住所はみな同じということになる。字は後で変えられた可能もあるので、同一人物である可能性が極めて高いと言えよう。

もし以上の推論に問題がなければ、日本留学していた兪大純は一人だけで、それは兪明震の子ではなく、兪明堂の子だということなる。

そうだとすれば、最後の疑問として、なぜ彼が1903年の頃から兪明震の子と呼ばれたりするようになったのであろうか。周囲の誤認の可能性もあり、さらに本人が当時実際に周りにそう称していたことも考えられる。また前述のように、呂金水氏はかつて兪明震が従兄弟兪明堂の子兪大純を養子にしたと仮説し、後に自ら否定したが、可能性としては残る。しかし、これはあくまでも推測で、現時点ではまだその直接の証拠はなく、さらなる史料の発見を待たなければならない。

以上の考証をもって、本稿では、兪大純が二人いたという説を採らず、以下すべて同一人物として扱うことにする。

二、海外留学と革命運動

兪大純の日本留学前の経歴は詳らかではないが、私費留学生として1902年に来日し11月頃に東京に到着してから、まもなく成城学校に入学したことは『清国留学生会館報告』（清国留学生会館幹事編）などに示されている[15]。しかし、今回の留学生活は長く続かず、翌年の五月頃いわゆる「拒俄運動」が起きた際に帰国したのである。

拒俄運動は日本留学生の間に起きたロシアの中国東北支配に抗議する運動で、学生軍として

拒俄義勇隊を組織し帰国してロシア軍と戦うことを目的とした。その組織は本部と甲・乙・丙の三つの部隊からなり、160余名の留学生で構成されたが、その本部構成員の中に兪大純の名前が見出せる[16]。しかし、留学生たちの行動は清朝政府の日本駐在公使蔡鈞から、ロシアに抗議するという名のもとに反政府の革命を行うものと見なされ、その組織ができてまもなく清朝政府から依頼された日本の警察によって解散させられた。その後、そのメンバーを中心に反政府革命を旨とする軍国民教育会が結成され、革命を実践するため多くの留学生が日本から帰国する。前述の1903年7月に湖広総督端方が両江総督魏光燾に宛てた電報の内容からも分かるように、兪大純もその一員としてこの時期に帰国したと見られる。

1904年、軍国民教育会の浙江出身の留学生を中心に、上海で光復会が結成され、兪大純もその一員となる[17]。光復会は政府高官の暗殺と武装暴動を主な活動とし、結成後そのメンバーが憲政考察五大臣の暗殺（呉樾、1905）、安徽省巡撫恩銘の暗殺（徐錫麟、1907）など多くの暗殺事件を起こしている。また、兪大純も自宅で暗殺用の爆薬の製造実験[18]をしたり、華興会のメンバー万福華らとともに兵部尚書鉄良の暗殺計画[19]を立てたりして、光復会の会員として積極的に反政府運動に加わっていた。

1905年9月、兪大純が再び日本留学のため来日し、宏文学院を経て1908年4月に第一高等学校予科に入学するが[20]、この二回目の日本留学のきっかけは暗殺活動または爆薬製造実験の失敗で清朝政府の逮捕から逃れるためであった可能性が大きい。第一高等学校に入学するまでは私費であったが、第一高等学校合格後は、1907年末に清朝政府と日本政府との間に結ばれた「五校特約留学計画」[21]により、官費が与えられるようになった。第一高等学校が受け入れる中国人留学生の定員は50名[22]とされ、その受験者は定員の10倍近くに上ったため、その競争率は極めて高かった[23]。ゆえに兪大純は同校に入学するために並々ならぬ努力を払ったと思われる。

しかし、せっかく官費を得られる難関校に入学しながら、その後まもなく退学したと見られる。第一高等学校の官費留学生として兪大純が光緒三十四年五月二日（1908年5月31日）に順天堂病院の診療を受けた記録はあるものの[24]、宣統元年（1909）閏二月に作成された第一高等学校予科第一期官費生の名簿[25]と、同年4月の第一高等学校予科卒業進学者名簿[26]にはすでに兪大純の名前が見当たらないので、1908年の間に退学したと思われる。

では、第一高等学校退学後の兪大純はどこへ行ったのか。交際のあった蔡元培の著述を調べたところ、兪大純についていくつかの記述があった。

1908年7月下旬、蔡元培が留学先のドイツ・ライプツィヒからパリ滞在中の親友呉稚暉に宛てた返信のなかに、「兪君省羞には未だ会ったことがない。上海で一度会う約束があったが、ついに会えなかった（一昨年の春だったと覚えているが）。」[27]とある。先に呉稚暉から蔡元培に宛てた書簡は見つかっていないが、蔡元培の返信の内容から呉稚暉が書簡の中で章士釗、兪大純らに関する当時の情報に触れたことが分かる。場合によっては、兪大純も現在ドイツに留学中であることを呉稚暉から教えられたのに対して、蔡元培がまだドイツで兪君に会っていないと答えたものと理解することも十分可能である。

1911年10月11日、蔡元培はライプツィヒからベルリンに赴き、そこで留学生の兪大純、李儻、

顧兆熊らに会い、武昌暴動後の行動計画について相談する[28]。

1911年10月24日、蔡元培は呉稚暉への書簡で、今後の行動計画についてベルリン中国人留学生会館にもよく出向く兪大純と連絡を取るよう伝えている[29]。

1911年10月末頃、蔡元培は兪大純及びその妻と一緒にベルリンから帰国する[30]。

これらの記録から、兪大純が第一高等学校退学後、1908年頃にドイツ留学に赴き、ドイツ滞在中に蔡元培とも親交があり、1911年10月頃に武昌暴動の朗報を受けて蔡元培とともに帰国したことが分かる。

また、先にも触れたが、李文禕・武田熙『北京文化学術機関総覧』（新民印書館、1940年）によれば、兪大純がベルリン工科大学に入学していたことが分かる。

三、東北実地調査

ドイツ留学から帰国後の兪大純の経歴は資料が少ないため分からない部分もあるが、帰国直後蔡元培が教育総長を務めていたころに一時教育部で働き[31]、その後交通部鉄路処長、副局長を歴任している[32]。また、1929年に設立された学術研究団体中国学会の設立当初の会員名簿84名に兪大純の名が見られる[33]。1930年頃、軍閥劉峙と仲たがいし、交通部隴海鉄路局長を解任され、居場所を失う[34]。

1932年から1933年の間、兪大純が仕事を失って時間の余裕ができたのも原因の一つか、満州事変後日本に支配されている中国東北部に二回出かけて、半年間もかけてその現状を実地調査し、1933年12月にその調査記録『東北実地調査記』[35]を出版している。ここにその主な内容を紹介し、著者の日本の中国東北支配に対する態度を考察する。

同書は筆者が中国国家図書館で見つけたもので、以下の同書に関する内容はすべてそれに依拠する。煩雑を避けるため一一注記しないことにする。

書名の題字は、同じ紹興出身で広東省長などを歴任し、満州事件後に日本の満州支配に抵抗活動を続けた朱慶瀾によるもので、また親友蔡元培の題字「百聞不如一見」も載せられている[36]。

同書の例言によると、今回の調査と資料収集はいろいろ困難を伴ったという。調査の都合上名前を変えたりして、下層から権要まで各階層の人に調査協力を依頼し、また日本軍の尋問と捜査から調査資料を隠す場面もしばしばあって、苦労して得た貴重な資料を捨てざるを得なかったことさえあると記されている。また同じ例言の中で、「九一八事変」という言葉は日本軍が事実を無視し自らの非を隠すために作った名詞であり、中国人がそのまま使うのは妥当ではないから、本書では「事変」の代わりに「暴奪」「惨禍」を使うという著者の独自の見解も示されている。

本文は、「九一八暴奪の起因」、「暴奪後の東北の無政府混乱状況」、「偽国建国促進運動」、「傀儡国の成立経過」、「傀儡国行政の概要」、「日本の愚民政策の実施」、「日満協定書は東北併呑の判決文なり」、「日本の東北実業の略奪」、「日本の東北金融の略奪」、「日本の東北原料に対する必需」、「ソ連の中東鉄道売却の戦略」、「日本の東北移民の幻想」、「日本の青幇[37]加入の陰謀」、「日

本の回教加入の陰謀」、「東北義勇軍の現状」、「日本軍の東北同胞殺戮の惨状」、「日本軍軍紀の廃弛」、「東北同胞の末路」、「中国人と日本人の比較」、「結論」など二十章からなり、最後に付録として「日本の中国侵略年表」が載せられている。

このように、『東北実地調査記』は満州事変後の東北の現状を中心に幅広い内容を含んでいる。本稿では、紙面の関係もあり、おもに最後の二章を見てみることにする。

第十九章「中国人と日本人の比較」では、作者は次のように述べている。歴史と地理の関係からしてみれば、日本と中国がお互いに提携すべきであるが、日本は全くその誠意がなく、特に甲午戦争（日清戦争）以来は、手段を選ばずに次々と中国を侵略している。しかし、残念ながら、このような亡国の危機に瀕しているにもかかわらず、自衛の策を講ずるどころか、敵に協力し目先の安逸を貪る売国者もいる。強国の日本さえ危機意識が強いのに、弱国の中国はかえって危機意識がない。それはいったいなぜであろうか。近代以来、日本が国民の教育に全力を尽くしているのに対して、中国は旧来の科挙教育制度の影響もあり国民教育のレベルが低く、国民の教養と国家意識が低下している。それに生活の圧迫と環境の誘惑が加わり、一部の人は売国奴になってしまう。また、日本人は信仰心が強く、何事にも積極的で、さらに戦いを好む傾向さえあるのに対して、中国人は信仰心が薄く消極的で戦いに弱い。このように、作者は自らの観察によって、日本人と中国人を比較して、日中の国民性の違いを指摘している。

第二十章「結論」では、日本が果たして永久に中国東北を占領することができるかについて論じている。国際関係から見れば、アメリカやイギリスがすでに日本を強く警戒しており、日本の置かれている国際環境は第一次世界大戦前のドイツとあまり違いがない。また日本国内では軍人による暗黒政治が横行している。それにもかかわらず、日本は中国東北の占領に対して強硬政策を続けている。その結果、日本の東北占領が必ず第二次世界大戦の導火線になる[38]。大戦になれば、軍事物資の供給と兵力の面から見ても日本が勝つ見込みはない。ほかに、現在日本に支配されている東北地域では、日本の高圧政策により人々の反日感情が高まり、抗日ゲリラの活動も活発化していて、占領者がすでに四面楚歌の窮地に追い込まれている。このように、国際関係、日本国内の事情と東北の現状から判断して、日本が永久に東北を占領することはありえず、日本が最後の審判を受ける日はすでに遠くないと結論付けている。また、実際に第二次世界大戦が起きたとき、中国はどう対応すべきかについて、日露戦争の際、中国は中立政策を取ってきたため、その後中国はいたるところで日本に牽制され、今日の結果に至っている。このような前車の覆轍を戒めとして、中立政策は絶対取ってはいけないとも論じている。

最後に、当時親日的とされる人が少なからずいることに関連して、作者は日本の中国侵略年表という形で1592年豊臣秀吉の朝鮮出兵から記し始め、台湾出兵、琉球併合、日清戦争、北清事件など数々の事実を詳細に記載し、日本は中国人に親しまれるべき理由が全くないと述べ、さらに中国人が自衛のために一致団結し、利益の誘惑と敵の威嚇に負けずに、それぞれ力を尽くすことこそ、国を救う道であると結んでいる。

このように、作者が日本の中国侵略に対して大きな憤慨を抱き、その東北支配の事実をもっと多くの人に知ってもらうために、自ら危険を冒して調査し、いろいろな困難を克服してその

調査結果を著書の形で公表したのである。

前節に述べたように、作者は若い頃から二度も日本に留学し、日本のことをかなり知っているから、十分に知日者と言えよう。また、これまで見てきた内容から見る限り、反日的とも言えそうである。しかし、その晩年、彼は漢奸と目され、最後には暗殺される運命にあった。それはいったいなぜであろうか。

四、晩年の活動とその最期

1934年から1937年までの数年間の兪大純の活動を示す資料は今のところ見つかっていないが、1930年に職を失って以来、ずっと安定した職についていなかった可能性が高い。ここで主に彼が1937年に北京市立高級工業学校校長に就任してから1940年7月に亡くなるまでの活動を考察する。

北京市档案館所蔵の1938年8月時点の『各級職業学校概況表』（档案番号J004-002-00557）によると、兪大純は1937年12月に北京市立高級工業学校校長に就任している。同学校は1907年4月に創設された初等工業学堂がその前身であるが、第一芸徒学校、京師公立職業学校、市立高級職業学校を経て、1937年12月に同校名に改称されたものである。教職員数43人、学生数114人とそれほど大きな学校ではないが、当時の北京市立の職業学校としては最大規模で、毎月北京特別市から経費3380元を与えられている[39]。

校長就任後まもなく、兪大純は「改革職業学校意見書」を提出し、自らの学校改革についての意見を述べている。そのなかで、彼はかつての留学先ドイツの職業教育の経験に基づいて、まず中国の職業教育のもっとも大きな問題は、学生が入学前に自身の条件からしてどういう学校に入るべきか専門機関の指導を受けることがなく、多くの学生が入学後の明確な目標を持てないことと、職業学校とその学科の設置が必ずしも社会の人材需要と合致していないことであると指摘し、その上で、市立高級工業学校の改革策として、入学後に学生それぞれの性質に基づいて指導する期間を設け、そのため学制を一年延長して、もとの三年制から四年制にし、さらに北方地域に農産品が豊富であることから農産品加工に関する学科を設置するよう提案している[40]。その後、新たな学科の設置は見送られたようであるが、学制の変更は受け入れられ、次年度の1939年からすべての学科が四年制に変わっている[41]。

また、北京市立高級工業学校は1938年5月から日本の傀儡政府とされる中華民国臨時政府建設総署の委託を受け、学制1年の土木工程特設学科も設置していた。定員は２クラスあわせて60名で、学生が卒業後全員建設総署の任用となる[42]。

兪大純は校長として校務全般を統括するだけではなく、自ら日本語の授業も担当している。日本語の授業は各クラス週に5～6時間もあり[43]、担当教員には広島高等師範学校卒業の陳樹楷などもいるが[44]、土木工程特設学科の日本語の授業は主に兪が担当し、給料132元のほかに月々授業手当てを126元支給されている[45]。同時期の普通の労働者の月収が十数元程度であることから、収入の面でもかなり恵まれていたように思われる。

このように、兪大純は30年代の前半から一時期失職したが、1937年に校長就任後は学校の改

革に力を発揮したりして活躍し、社会的地位と収入の両面で恵まれた生活を送ることができた。では、彼の校長就任の背景は何だろうか。

周知のとおり、1937年７月７日の盧溝橋事件をきっかけに日本軍は中国への全面的侵略戦争を開始し、そして占領した地域で相次いでその傀儡政府を成立させた。北京においては、８月６日に新たに北京市政府が立ち上げられ、12月14日に王克敏を委員長とする傀儡華北政権中華民国臨時政府が樹立された。こういう状況のもとに、北京市では各種の学校を含め多くの団体の責任者が更迭された。職業学校の場合、1939年の頃に北京市にあった20校のうち、その責任者の大半は日本人か日本となんらかの関係のある人が就任していた[46]。1937年12月に新しい政府の指導のもと北京市立高級職業学校が北京市立高級工業職業学校に名称変更され、それに伴い、日本留学の経験を持ち、日本語の堪能な兪大純が選ばれたと思われる。また、当時傀儡政府では王克敏、湯爾和をはじめ、兪大純と同郷の浙江出身者が多く、教育総長の湯爾和の場合は1903年頃に兪大純と同じ成城学校に留学していたこともある。そう考えれば、推測の域を出ないけれども、兪大純の校長就任は誰かそういう浙江出身者から推薦を受けた可能性もある。

しかし、このような安定した生活は長く続かず、1940年の暗殺によって、その生涯に終止符を打たれたのである。同年７月20日午前11時頃、兪大純が人力車で華北政務委員会建設総署に赴く途中、何者かの放った銃弾が彼の体を貫通した。ほぼ即死状態で、いったん阜成門内大街路北59号にある自宅に運ばれ、それからさらに中央病院に送られたが、すでに死亡していた。建設総署総務局長に任命されて間もなく、まだ正式に着任していないときであった。人力車の車夫の話によると、犯人は白い服を着た二十代の男性で、後ろから拳銃を撃ったあと、自転車で逃げたという[47]。

当時の警察当局はこの暗殺事件の捜査にかなり力を入れたようであるが、結局犯人は捕まらなかった。では、いったい何者が兪大純を暗殺したのであろうか。

前にも述べたが、兪大純について兪明震との父子関係に触れた読み物、論文がきわめて多い。しかし、兪大純の死に触れたものはほとんどない。1979年以降の正式に刊行された主な学術誌の論文がほぼ網羅されているとされる「中国知網」のデータベースで全文検索しても、兪大純の死に触れた論文は一件しかなかった。それによると、国民政府軍事委員会調査統計局（普通「軍統局」と略称する特務機関）局長戴笠から直接指示を受けた天津特務機関が1937年以降、日本の中国侵略に協力したいわゆる漢奸の暗殺を展開し、まず中華民国臨時政府常務委員会委員長王克敏を刺傷し、さらに相次いで河北省教育廳廳長陶尚銘、天津総商会会長王竹林、華北聯合準備銀行総経理兼天津税関総監督程錫庚、建設総署局長兪大純、華北政務委員会教育総長方宗鰲などを暗殺したとある[48]。

また、北京市档案館所蔵の資料によると、兪大純が暗殺されたのと同じ頃、北京医学科学院院長劉兆霖、教育総署署長方宗鰲、北京『新民報』編集局長呉菊痴、北京市工務局長舒壮懐などが相次いで暗殺され[49]、建設総署総務局長張志遠は一命を取り留めたが、家財を奪われた[50]とある。これらの記録から、当時華北では暗殺活動が頻繁に行われていたことがわかる。

ちなみに、北京市立高級工業職業学校の校長は兪大純の後任として北京大学土木工程科卒業

の李直鈞が任命されている[51]。

五、反日と親日のはざまー結びに代えてー

このように、兪大純は青年時代に長く日本とドイツに留学し、清朝政府の暗黒政治を目の当たりにしては、一時期積極的に革命活動に加わり、清朝政府要員の暗殺にも参加した。満州事変後には日本の中国東北支配に強い憤慨を抱き、その支配状況を究明するために自ら実地調査に乗り出し、その調査結果に基づいて、日本の中国東北支配は必ず破綻すると結論付けた。また、一部親日者がいるという現実を見ては、日本の中国侵略の事実を挙げて、日本には親しむべきところが全くないとまで述べている。しかし、1937年に北京が日本軍に占領されてからは、傀儡政府が直接管轄する北京市立高級工業職業学校の校長を務め、後に傀儡政府建設総署の総務局長に任命され、最後には漢奸と目され、国民党政府の特務機関に暗殺された。このように、彼の生涯はまったく皮肉な運命のめぐり合わせとでも言うべきものであった。

兪大純のこのような行動軌跡を見ると、一時は反日的で、一時は親日的だったと捉えることもできるかもしれない。しかし、人間の行動は置かれた状況、周囲の環境、立場などに大きく影響されることも忘れてはならない。1930年代前半から長く職を失っていた兪大純にとって、1937年の高級工業職業学校校長の就任は再就職へのチャンスであり、親日のためというよりも、生計を立てるためであったと見たほうが妥当かもしれない。

近代の中国人海外留学生は膨大な数に上る。これらの留学生の留学先国に対する感情について、全体的に見る場合、学界では「留米親米、留日反日」という説がある。あまり聞きなれない言葉であるが、アメリカに留学した人はアメリカに親近感を持ち、日本留学した人は反日となるという意味である。日本留学した人に果たして反日者が多いのだろうか。もし日本留学した人を「反日」、「親日」、「どちらでもない」、「時には反日的で時には親日的」という四つの類に分類すれば、それぞれどれぐらいの割合を占めるだろうか。これは膨大な数の留学生に対してその帰国後の行動軌跡を詳しく研究することが必要であるから、実際はほぼ不可能であろう。ここでは、そのおおよその様子を見てみることにする。

まず「留日反日」といわれる理由はいったいどこにあるのだろうか。留学生の留学先国に対する感情は国の受け入れ政策、受け入れ先の対応、社会の状況、文化の異同、帰国後の社会と生活の環境、個人の素養など多くの要素に影響されるのは言うまでもないが、社会状況から見て、留学生たちが活躍した20世紀の前半はちょうど日本の中国に対する二十一か条要求、満州事変、日中全面戦争など、日中間の不幸な歴史があった時期でもあった。中国人として、日本留学経歴があろうとなかろうと、日本が中国に対して取ったこれらの行為を目の当たりにして、反日的な言動を取るのは人の情からして当然である。これが日本留学した人に反日者が多いと見られる主な理由であろう。日本留学期間中に差別的な待遇を受けていたから反日的になったという説も一般的に受け入れられているが、主な理由ではないと思われる。

しかし、このような反日的と見られる日本留学生の中にも、自らの日本留学の体験を以て、日本の社会現状と日本文化に深い理解をもち、周りの多くの日本人に対しては親しみを感じて

いたという人も数多くあったことを忘れてはならない。

一方、留学生の中に親日的とされる人も少なくない。日本の中国占領期間中、中央から地方までの各種の傀儡政府や組織で働いた人は親日的とされる場合が多いが、その人数は実に膨大である。そのうち、日本留学の経歴を持っている人も高い割合を占めている。たとえば、中華民国臨時政府のもとで何らかのポストについていた人物214人の名簿があり、それぞれの出身校や経歴などが記されている。統計上の都合から、そのうちの浙江省出身者28人の出身校を見てみると、日本の学校を卒業したものが16人（一人はドイツにも留学）、アメリカなど日本以外の学校が合わせて4人、中国国内の学校が４人（一人は長く留学生監督として日本に滞在）、出身校不詳者が4人で、日本留学の経歴を持っている人の数が圧倒的に多い[52]。

戦後、傀儡政府で働いた人の多くが漢奸として起訴され、その数は3万人以上にも上る。親日的イコール漢奸ではないので、親日的とされる人の数はもっと多いはずである。しかし、当時の傀儡政府のもとで働いたからと言って、彼らがすべて親日的だといえるのであろうか。上記浙江省出身者28名に限っても、王克敏、湯爾和、王蔭泰（普通江蘇省の出身とされるが、名簿の中では「祖籍浙江」とされている）など積極的に日本の中国占領政策に協力していた、まさに漢奸の名に相応しい者も確かに少なくないが、日本の中国侵略に反対し、親日の意思が全くない人でも、ただポストの誘惑に負けたり、生活のために仕事が必要だったりした人も少なくなかったであろう。また逆に日本一般に対しては親近感を持つが、日本軍の中国侵略に対しては強い反感を持った人が多く、さらに場合によっては内心では反日ではないが、周りの状況に配慮したりして反日を装っていた人もいただろう。

こうしてみれば、近代以来の中国人日本留学生全体に対して、一概に反日的または親日的と結論付けるのは問題があると思われる。これは留学生個人についても同じで、多くの人は一貫した主義主張がなく環境や立場など諸条件により親日と反日の間を揺れ動くものであるから、彼らに対してその一時の行動だけで「親日」または「反日」というレッテルを貼るのは必ずしも妥当ではないと思われる。

1）1903年に日本留学生によって設立された反政府革命団体。武装暴動と暗殺活動を主な行動方式とする。

2）四冊からなり、光緒戊戌年（1898年）の刊行である。

3）『兪氏宗譜』、49～50頁。

4）中国史学会編『辛亥革命』第１冊、上海人民出版社、1957年、373頁。

5）同上、390頁。

6）馮自由『革命逸史』第三集、中華書局、1981年、171頁。

7）前掲注4に同じ、453頁。

8）呂金水『倆兪大純辨正記』、未発表（作者の好意により貴重な原稿の提供を受けた）。同氏はかつて「兪氏宗譜破訳一大疑団」（『紹興晩報』、2000年12月2日）の中で、『兪氏宗譜』の記載を根拠にして、兪大純は兪明堂の子であると主張したことがある。本稿は前の主張に対して自ら修正した形となる。

9）袁維徳氏から提供されたものによる。

10）兪明震『觚庵詩存』（上海聚珍倣宋印書局、1920年）に収録されている。
11）前掲注8に同じ。
12）紹興魯迅記念館蔵、1903年2月頃、蔣智由・経亨頤・兪大純・陶成章・周樹人・許寿裳など紹興籍日本留学生27人が紹興同郷に留学生を多く派遣するよう呼びかけた書簡。
13）北京市档案館蔵「臨時政府関於任命張鼎勳為北京市公署教育局長的令和教育局関於成立、局長就職、啓用新印日期事項的呈文給各機関的公函及北京市公署的指令」（档案番号J004-001-00454）のなかで、北京市立高等工業職業学校校長としての兪大純の字は慎修であると示されている。
14）兪大純の海外留学歴及び蔡元培との交友については次章で触れる。
15）兪大純自身も1933年に著した『東北実地調査記』の中で、1902年に実見した日本社会の様子を示している。
16）馮自由『革命逸史』第五集、中華書局、1981年、35頁。
17）紹興市「大通学堂」展示室の「光復会党人録」にも兪大純の名が見える。
18）兪大純の娘兪瑾氏が『江青伝』の著者叶永烈氏のインタビューに応えた記録による。『江青伝』上冊、新疆人民出版社、2000年、44～48頁。
19）万先俊「回憶我的祖父万福華」、『江淮文史』、2005年第６期、50頁。
20）遊学生監督処『官報』（第十七期）、光緒三十四年（1908）四月、45頁。
21）日本文部省が東京高等師範学校・第一高等学校・東京高等工業学校・山口高等商業学校・千葉医学専門学校を官費中国人留学生受け入れ学校に指定し、それぞれの学校が数十名程度の留学生を受け入れるかわりに、清朝政府から一定額の補助費を受ける計画。1908年4月より実施。
22）1908年の実際の入学者数は60名である。
23）拙稿「清末『五校特約』留学と浙江省の対応」、『中国研究月報』1998年2月号、25頁。
24）遊学生監督処『官報』（第十八期）、光緒三十四年（1908）五月、58頁。
25）遊学生監督処『官報』（第二十八期）、宣統元年（1909）閏二月、22～26頁。
26）遊学生監督処『官報』（第三十期）、宣統元年（1909）四月、19～22頁。
27）中国蔡元培研究会編『蔡元培全集』第十巻、浙江教育出版社、1998年、69頁。
28）同上、105～106頁。
29）同上、111～112頁。
30）同上書第十七巻、459頁。
31）陳可畏『翻開中国現代教育史冊：蔡元培在1912』、『人物』2001年12月。『人物』誌ネット版による。
32）高平叔ほか編『蔡元培書信集』下冊、浙江教育出版社、1596頁。
33）胡道静ほか『回憶我的学生時代』、『史林』2004年増刊号、23頁。
34）叶永烈『江青伝』上冊、新疆人民出版社、2000年、44～48頁。
35）従来その存在が確認されていなかったためか、同書の引用と紹介は見当たっていない。
36）1933年9月28日に蔡元培が兪大純に宛てた書簡（前掲『蔡元培書信集』下冊、1596頁）によれば、兪大純が序の作成と出版費用などについて蔡元培に支援を依頼したことがあり、蔡が序の代わりに題字を書き、出版費用などを中山文化教育館副主任で『満州偽国』の作者陳彬和に支援を依頼した。ゆえに同書の出版は蔡元培と陳彬和の支援によるものであると見られる。
37）もと江南地域を活動の中心とする秘密結社であるが、のちに東北地域にも活動の範囲を広げている。
38）著者は第二次世界大戦の時期を1936年以降と予測している。
39）李文禕・武田熙編『北京文化学術機関総覧』、新民印書館、1940年、151～152頁。
40）北京市档案館蔵「北京特別市市立高級工業職業学校校長兪大純関於改革職業学校意見書」、档案番号

J004-002-02080。

41）北京市档案館蔵「北京特別市職業学校概況表」（1940）、档案番号J004-002-00822。

42）北京市档案館蔵「北京市立高級工業職業学校関於特設土木工程速成班的呈文及市教育局的訓令、指令（付：簡章、暫行弁法、教職員履歴表、学生像片表）」、档案番号J004-002-00560。

43）北京市档案館蔵「北京特別市職業学校概況表」（1940）、档案番号J004-002-00822。

44）北京市档案館蔵「北京市各級職業学校職教員一覧表」、档案番号J004-002-00623。

45）北京市档案館蔵「北京特別市教育局各付属機関主管人薪金一覧表」、档案番号J004-001-00449。

46）余子侠「日偽統治時期華北淪陥区的職業教育」、『抗日戦争研究』、2007年第2期、94頁。

47）北京市档案館蔵「内四区警察分局関於兪大純在豊盛胡同被人撃傷身死的報告」、档案番号J181-22-8568。また、同報告によると、警察が兪大純の自宅で取調べをした際、妻の梁氏と自称兪大純の兄の兪石郷が応対し、兪石郷は兪大純を上海の出身であるとも称していたという。正しくは長く上海に住んでいたというべきであろう。

48）黄家盛「抗戦時期国民党軍統局之歴史考察」、『党史研究与教学』2001年第４期、47頁。

49）北京市档案館蔵「市警察局関於厳緝医科院院長被刺等凶犯的訓令」、档案番号J185-2-2328。

50）北京市档案館蔵「内六区警察分局関於箭厂胡同張志遠家被搶的報告」、档案番号J181-22-8586。

51）北京市档案館蔵「北京特別市関於任命高級工業職業学校校長的訓令」、档案番号J004-002-00790。

52）北京市档案館蔵「王克敏等簡歴」、档案番号J144-１-21。